

第 77 回人権週間の事業として、市内小・中学校に人権作文、人権標語を募集したところ、作文 27 編、標語 177 点の応募があり、入選した作文 10 編の表彰と、入選した標語 10 点の発表を行いました。

作文の部において児童・生徒たちは、学習や日常生活の中で感じた人権問題について書いており、とてもすばらしい作品ばかりでした。入選した中から、作文 1 編と標語をご紹介します。

差別に対する認識

東中学校 2年 高見 彩花

小さいころ読んでいた本を読み返してみ、「働くお父さん」、「家を守るお母さん」という表現を目にし、小さいころは何も思っていなかったその表現に違和感を抱きました。

「性別役割分業」の考え方が日本の制度やイデオロギーが流入し、男性の社会的活動と女性の家庭的役割が、明確に分かれるようになったそうです。

現代では、「性別役割分業」の打破を目指す動きが強まっています。が、現在でも、今だに男尊女卑の考えが日本人に染み付いているのではないかと思います。自分の家庭では、父も母も、自分たち子どもも、家族の一員として家事を行うため、「性別役割分業」を身近に感じたことはありません。

しかし、学校となると、家庭とは違って視野が広がるため、身近に性別を感じることが多々あります。例えば、持久走の距離が男女で違うことに、私は疑問を持ちました。しかし、体力や平均的な持久力の違いを理由に距離を分けているため、すぐに「差別」とは言い切れません。つまり「男女を比べてみて女性を低く扱う」という意図ではなく、「体格や体力差に応じて公平に競えるようにする」という考え方に基づいています。では、一人ひとりの体力は違うのに、性別だけで一律に距離を決めてしまうのは、本当に公平なのでしょうか。それならば、個人の体力に応じた走る距離を選択できる仕

作文

組みの方が、人権を尊重した取り組みに沿っているのではないかと思います。更に、「女子だから短い」という決め方は、性別の固定観念を強めてしまっていると思います。

結論としては、男女で距離が違うこと自体は差別にはなりません。その理由付けによつては「不合理な差別」とされることもあるそうです。男女で走る距離が違うことに、不満を持つ人は多いと思います。現代のスポーツ界では「男女で条件をそろえる方向」や「個人のレベルに合わせて調整する方向」が重視されているそうです。学力テストでも男女を分けて行うなんてことはないから、いつかは、個々の能力に適切な体力測定が出来たらいいと思います。

しかし、どんなに先入観を持たないようにしても、私たちは気づかないうちに「男だから」「女だから」という「思い込み」をしてしまうことがあります。そう思ってしまうのは、男女差別の概念を知っている大人たちから、影響されるからだとは思いますが、心理学や社会学でも、差別や偏見は「社会的に学習される側面が強い」と言われています。子どもは生まれつき「男女差別」や「人種差別」などの概念を持っているわけではなく、周囲の大人や、社会の言動、制度から、そういった思想を学びやすいのです。自分が経験したものでは、「女の子だからおとなしくしなさい。」や、「女の子だから足をとじなさい。」などです。「何でわざわざ頭に『女の子だから』という言葉を書くんだろう。おとなしくしてほしいなら、足をとじてほしいなら、普通にそれだけ伝えればいいのに。」と思いました。大人の何気ない言葉が、子どもの意識の中で「性別による役割の違い」としてすり込まれ、その連鎖で、差別は今も生きているんだと思います。一方で、子どもは大人の言葉や行動から学ぶだけでなく、自分自身のまわりの環境からも価値観を作っていきます。だから、差別の概念をすでに持っている大人たちが、次の世代へどう伝えるかが大切だと思います。「差別はいいこと、不公平なことだからなくしていいこと。」という思いを示す大人がいれば、子どもは偏見よりも「平等の感覚」を学んでいくと思います。つまり、差別の概念が大人の世界にあること自体が、子どもに良くない先入観を与える要因になり、同時に、大人がその概念を批判的に伝えるかどうか、子どもの価値観形成に大きく影響を与えるということです。

子どもたちが、大人がかけてくれた何気ない言葉に疑問を持つことも、偏見に流されない力を育てる、日々の生活や日常の中で、不公平だと感じることを、それがどこから来ているのか考えてみたり、一つの意見や見方だけではなく、複数の視点から客観性のある判断をして、批判的思考やリテラシーを持つことで、周囲の偏見や差別に流されないようにしたいです。

今はまだ、学ぶ側の立場ですが、自分が大人になったら、子どもたちに自分たちの思想を押し付けず、一緒に社会や人権、差別について理解し考えていきたいと思います。

人権標語

ありがとう あしたもあそぼう

いっしょにね

小筑紫小学校 一年 佐井 獅音

よびすては だいじな名前 きずつくよ

山奈小学校 二年 下村 光喜

いい心 みんなにわけよう 何度でも

大島小学校 三年 前田 隼人

ありがとう やさしいことば たいせつに

山奈小学校 三年 池ノ上 夏帆

自分はね 世界に一人 ばくだけだ

平田小学校 四年 松本 旬平

助け合い 協力し合い 乗り越える

宿毛小学校 五年 徳田 琳太郎

みとめ合い 個性の花を 咲かせよう

山奈小学校 六年 勝村 颯

なりたいを 叶えられるのは 自分だけ

東中学校 一年 所谷 明音

あの言葉に救われた 今度は私が救う番

片島中学校 二年 伊与田 穂乃花

皆が違う だから世界は 鮮やかだ

宿毛中学校 三年 澤近 航輝